

2) 一農場で歩様異常を認める肥育前期牛 4 症例

末元 和輝

(北薩農業共済組合)

【背景】

2018 年 9 月から 2019 年 6 月現在までにある黒毛和種肥育農場で類似した症状・歩様を示す肥育前期牛 4 症例に遭遇し、その治療に悩んだため、今回紹介する。

【症例】

1 例目は 2018 年 9 月、歩き方に違和感があり、食欲低下との稟告で往診依頼。初診時は歩行に若干の違和感があるが、他の症状（呼吸器・消化器症状等）は認められなかった。翌日に症状の改善が認められなかった為、ステロイド系抗炎症薬を使用した。その後、2 週間治療を行うも歩様状態は好転しなかったが、食欲の改善が認められたため安静を指示。しかし 2 週間後、起立困難となり再度治療を開始。それから数日間、ニューキノロン系抗生剤にて治療を行い、全身症状・歩様共に改善傾向が認められたため再度安静を指示。その後、食欲不振による往診依頼はあるものの、運動器障害は認められなかった。

他の 3 症例も導入されてから 3 カ月以内の肥育前期に跛行・食欲低下を示している。それぞれ異なる治療を行ったが、これらは、治療が長期化することなく、歩様の完全な改善とまではいかないものの食欲の改善が認められたため、安静を指示し、経過観察としている。

【考察とまとめ】

症例 1~3 はステロイドとアンピシリンの選択が症状を悪化させてしまった。また症例 1、3 はその後の治療で、ニューキノロン系抗生剤の投与により臨床症状の改善が認められたため、アンピシリンに感受性のない細菌が原因の感染性関節炎であることが示唆された。これらの反省を踏まえ症例 4 は、非ステロイド系抗炎症薬とテトラサイクリン系抗生剤を投与したところ、著効を示した。これより、同農場で同様の症状を認める症例に遭遇した場合、初診で非ステロイド系抗炎症薬とテトラサイクリン系抗生剤を投与、著効を示さない場合、ニューキノロン系抗生剤の投与が有効ではないかと考えた。

最後に、今後、同様の症例が発生した場合、類症鑑別を行い、適切な第一選択薬を選択して処置が行えるように努めたい。また、原因を究明して予防策を講じていきたい。